

編者はしき

——無数の奇蹟的治癒が起こった「第八章『生長の家』の超薬物学」——

「生命の實相」は、谷口雅春先生の手になる著作物ではあるが、しかしその先生を導き、先生をして書かしたものがいた。それを暗示しているのが、本全集第一巻巻頭に掲げられた「黙示録」第一章十二節—二十節に他ならない。キリストの弟子の一人であるヨハネに現れたキリストは、三十三歳のそれではなく「白髪のお翁」の姿をもつて現れる。その姿こそ「永遠のキリスト」であり、「真理(キリスト)」の象徴であり、そして実はそれこそが生長の家の神様であるのだ。つまり、この神様が谷口雅春先生を導いて、「生命の實相」を書かしたというわけなのである。だからこそ、この「生命の實相」を読

むだけで、病が癒され、運命が好転する等の数々の奇蹟が生まれたのである。「生命の實相」が聖典の中の聖典と言われる所以である(なお、この「白髪のお翁」は谷口雅春先生の背後に現れ、それを何人も人が霊視して、そういう方々の視た姿を聞き取りして、彫刻家の服部仁郎氏がそれを造形したものが、いわゆる「ご神像」であり、本全集のカバー写真である)。

本巻に収録された全三章は、いずれも「治病」を主眼として書かれている。これらを読めば、なぜ、キリストと同じように谷口雅春先生の所説の真理が奇蹟を起こし得たのか、信仰によってなぜ病が癒えたのか、その「秘訣」が余すところなく明示されている。曰く、

「あらゆる病氣は『念の影』即ち『想像病』であって、迷いから起った恐怖心で自分が勝手に造っているのでありますから、この点、病氣になる大人は幽霊を恐怖する子供と、何らその無知な点に於て異らないのであります。太陽が出れば子供の恐怖心も消え、従つて幽霊も消えてしまうと同じように、『真理』という太陽が心の中に輝き出せば、

病気はおのずから消える。「真理」という太陽を掲げて皆さんの心を照らす——これがこの書の役目であります」(二四〇―二五頁)

「病気の苦しさを超越する一つの方法は、先ずじつとその苦しみの真相を見極めることであります。……そしてその痛み、苦しみをば、よく観察して「それは果してこの肉体が痛がつているのだろうか。肉体は物質だから知性を有たないから「痛い」と感ずるはずがない。そうしたらこの「痛い」と感じているのは「心」だ。「心」は無形のものだから実質的に故障が起るはずがない。実質的に故障がないのに「痛い」と思うのは「痛い」という夢を見ているのだ。……最初その痛みが自分の痛みだと思っていたのに、だんだんそれが離れて観られるようになり、痛みは感じているがその痛みはもう自分の痛みではない、完全円満な自分というものが他にあってその痛みを第三者として観ている、ちようと自分が「痛み」というラジオを第三者として聴いているような塩梅になって、自分自身が痛まなくなり、自分自身が痛まなくなると、結局その病気は治ってしまうのであります」(四八―四九頁)

「生長の家に「背水の陣を布いて生きる」という生き方があります。この背水の陣を布いて生きる生き方はすべての退路と依頼心とを捨てて、進むほかに道がないようにして嫌やでも応でもまっしぐらに生きて行くという生き方であります。この生き方になり切つて、薬にも注射にも依頼心を起さず、唯、自分が治るには「自分の生命力」に頼るほかはないと本当の決心が出来て来ますと、今まで自分の内に隠れていて働かなかった無尽蔵の力が働き出して来て今まで不治だと思つた病がたちまちケロリと治つてしまうようなことになるのであります。不治というのも、実に薬に対して依頼心を起していたからこそ不治であつて、全然他物に依頼心を起さず、ひたすら自己自身の生命力にのみ頼るものは、自己の内に隠れている無限生命の源泉(神)に触れるので、「神はみずから助くるものを助く」という千古の金言を如実に味わわしてもらうことになるのであります」(一三三―一三四頁)

本書には「病気ほんらい無し」「治病の原理」が縦横無尽に説かれている。その中でも、本書収録の「第八章「生長の家」の超薬物理学」は、「生命の真相」全巻を通じて

最も奇蹟的治癒をもたらしてきた庄巻の章である。しかし、この「生命の真相」が説く真理によつてあまりに多くの病気が治癒するために、「治病宗教というあまりありがたくない迷信的な名称を賦与された」と本書に収められた「はしがき」にも記されている。

では、生長の家は、本当に単なる低次の治病宗教なのか、御利益宗教なのか。これに対して、谷口雅春先生は明快に次の如く説諭される。

「宗教家のうちには、『病氣などを自分で治すことは考えていない。そんな現世利益はどうだつて好い、自分は靈魂の救済を考えているのだ。』という方があるかも知れませんが、それは瘦我慢か、でなければ無知かであります。『真理の世界』に病氣は無いのでありますから、真理を知る以上は病氣の夢がごとく破壊されて、無病なる本来の完全な生命状態が顕れることが当然なのであります。それが出来なければ真理を知つたということはお出来ません」(七四頁)

まさしく「真理は汝を自由ならしめん」である。「真理」を知りさえすれば、そこに光が差し込み、闇は消える。「闇と病み」とは語源を同じくすると谷口雅春先生は説かれる。真理の光がそこに差し込みさえすれば、病もまた掻き消えるほかはないのである。「病氣が治ること」と「真理を知ること」とは無関係なのではない。それどころか、「真理を知つた」その証として病氣が癒えるのである。「真理」を哲学思弁の具に留めておいてはならない。「真理」とは、具体的に、日常生活上の様々な問題、悩み等について解決する道筋を明らかにし、そして実際に救う力を持たなければならぬものである。

請い願わくば、本巻を熟読玩味されることにより、「人間本来神の子・無量力」の真理を体感体得せられ、病床にある方はそこから立ち上がり、大いなる人生を切り開かれんことを。

平成二十四年七月一日

谷口雅春著作編纂委員会